

と僕は思っているらしいのだが、それにしても、と僕はときどき思い返す。自分はいったい何をしているのだろう。

乱歩の目録を編んだのは、いわば尻ぬぐいだ。やみくもに収集した乱歩関連資料は、体系化してひろくデータを公開することで、初めて価値あるものになる。ところが、当の名張市立図書館にはそれができない。そこで、何の因果か、僕が尻ぬぐいをする羽目になった。してみると、僕がつづけているアップトゥデートな乱歩関連資料の収集とインターネットを利用したデータの公開は、名張市立図書館の肩がわりということになるではないか。

そういえば、複数の名張市民の証言によると、市立図書館は現在、僕のブログを参考にして乱歩関連資料の収集を進めてくれているらしい。ことほどさように、過去を反省することもなく、未来を展望することもなく、ただただその場しのぎに明け暮れる。それがお役所の本質であり、お役人の実態だ。そんなのと関わりをもったばかりに、尻ぬぐいのあとは肩がわりか。なんか、おかしくないか。

おかしい。たしかにおかしい。おかしいけれど、仕方がない。僕はいまや有能比類なきライブラリアン、家なき子ならぬ館なきライブラリアンになってしまっていて、乱歩のこともいわば私立ライブラリアンの視点から考える癖がついている。だから、乱歩の最初の著作とも呼ぶべき手製本『奇譚』を活字化する、つまりは資料を読みやすい形で提供することの必要性に思い至り、こんな雑誌を出す仕儀

となってしまったのも、とどのつまり、私立ライブラリアンの血が騒いだ結果だったのだと思われる。だがそれにしても、ほんとに僕は、いったい何をしているのだろう。

いやはや、愚にもつかぬ手記に紙幅を費やしてしまったが、僕はこの手記を執筆するプロセスで、乱歩関連資料の収集を継続するのから中止するのか、それから、すでに所蔵している資料、とくに死蔵された寄贈図書をどう活用するのか、名張市立図書館にそのあたりのことを明確にしてもらうつもりでいた。「具体的な方針につきましては、現在のところございませんが」といった程度の答えしか返ってこないことは知っているものの、それもまたやっておかなくちゃいけない仕事だな、という気が僕にはする。

ところが、『奇譚』の活字化に時間を取られたせいで、といってしまうてはいかにもいいわけがましいが、残念ながら実現できなかった。もしかしたら来年の『伊賀百筆』第二十五号には傑作漫才「僕の図書館戦争 完結篇」を寄稿することになるかもしれないぞ、と不吉な予感をおぼえつつ、僕という一人称による手記はここまでとする。

さて、最後の最後で乱歩ファン各位にひとことお伝えしておこう。このあたりのお役所やお役人や有象無象には絶望していただくしかないにしても、江戸川乱歩の生誕地である名張という土地そのものは、今後ひきつづき未永く、切によろしく願いたい。

では、失礼を顧みず、お願いまで。忽々。